



# 学内広報

No.1297

2004.9.22  
東京大学広報委員会



東京六大学野球秋季リーグ戦で明治大学に快勝  
6回表の得点、台上で意気上がる佐々木総長、池上理事、古田副学長をはじめとする応援。(2ページに関連記事)

## CONTENTS

一般ニュース .....	2	キャンパスニュース .....	9
東京六大学野球秋季リーグ戦で明治大学に快勝、 第1回外国人人材活用に関する研究会を開催、事 務職員海外研修報告		留学生の進路希望に関する調査結果まとまる	
部局ニュース .....	7	掲示板 .....	10
東大病院にこここボランティア創立10周年記念式 典開催される、平成16年度防災週間に実施した行 事等について、台北医学大学杏声合唱団と東京大 学音楽部コールアカデミーのジョイントコンサ ートが開かれる		スポーツ・トレーニング(実習)開講のお知らせ、 教養学部で第101回オルガン演奏会の開催、生産研 で第13回技術職員等による技術発表会を開催、国 際研究集会国際学士院連合推薦事業：日本関係海 外史料研究 オランダを中心に	
		淡青評論「目的意識」対「漫然」.....	12

学生部

## 東京六大学野球秋季リーグ戦で明治大学に快勝

9月11日（土）東京六大学秋季リーグ戦が開幕された。第一試合東京大学対明治大学に先立ち、本学佐々木毅総長の始球式による投球があり試合が開始された。

又、応援には、佐々木総長ご夫妻ほか、池上理事、上杉理事、古田副学長、片山副理事、竹田学生部長はじめ多くの先輩、学生、教職員がかけつけた。

結果、春の優勝校・明治大学に2安打完封で勝利した。

総務企画室

## 第1回外国人人材活用に関する研究会を開催

9月8日（水）17時から山上会館会議室において「第1回外国人人材活用に関する研究会」が開催された。本研究会は、外国人留学生の採用に積極的な企業に対し、留学生の採用・育成に関する問題の検討を呼びかけ、26社の参加を得て実施に至ったものである。

当日は、渡辺浩理事・副学長から挨拶があった後、竹原敬二副理事から研究会の趣旨説明、続いて6月から7月にかけて本学に在籍する留学生を対象に実施した「留学生の進路希望に関する調査」の結果について報告があった。最後に参加企業各社における外国人の人材活用の現状の説明及び問題提起がなされ、活発な意見交換が行われた。

今後は2ヶ月に1回程度開催し、各企業での外国人採用・育成方法、雇用形態などの情報を交換し、幅広く問題に取り組む予定である。



研究会の様子

研究協力部

## 事務職員海外研修報告

本学では、全学協力基金により国際交流に熱意のある事務職員を長期間海外に派遣する研修制度をもっているが、平成15年にこのプログラムで派遣した2名から研修についての報告書が提出されたので供覧するとともに、今後、本制度での海外研修を目指す人々の参考とした。

### アメリカでの長期海外研修を終えて

柏地区学務課総務係 古川稔子

（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）

はじめに

私は東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）のため、平成15年3月28日から平成16年3月25日までのほぼ1年間、米国カリフォルニア州サンタバーバラに滞在しました。以下に本研修およびアメリカでの生活について報告します。

#### 1. ホームステイについて

サンタバーバラは、ロサンゼルスから北に車で2時間ほどの所に位置します。ハリウッドスターなど、多くの有名人が近郊に別荘を構えていることでも有名で、治安も大変良く、北側の山と南側の海に挟まれた、自然豊かな小さな街です。

私は過去に観光で海外に行ったことはありましたが、1年もの長期に渡って滞在するというのは初めての経験だったため、最初の3ヶ月はホームステイをして、アメリカでの生活に慣れることにしました。私のホストファミリーは共働きの白人夫婦と3人の子供たち（12歳と10歳の双子）で、敬虔なカトリック教徒でした。この家庭は過去に何人もの外国人学生を受け入れていて、その扱いにも慣れていました。私も、休日には教会の礼拝やピクニック、子供達の学校行事に誘っていただくなど、家族同様に接していただいたおかげで、ホームシックにかかることもなく、順調にアメリカ生活を送ることができました。

面白かったのは、家の中ではすべての部屋のドアが開けっ放しだったことです。トイレのドアも同様で、最初は何と躰のできていない家庭なのだろうと驚きましたが、アメリカでは「ドアが閉まっている」＝「入らないで欲しい」という意味なのだそうです。従って、誰が入っても構わない時は開けておくもののだと教わりました。

両親の役割分担ははっきり分かれていました。例えば、食事の支度と子供達を学校へ送っていくのは父親の担

当、子供達を迎えに行くこと、夕食後に宿題を見ること、洗濯は母親の担当でした。掃除は2週間に一度、通いの人が来て行っていました。私のホストファミリーは比較的裕福な家庭でしたが、このように通いの人に家の掃除を頼むというのは、裕福な家庭や共働きの家庭に限らず、かなり一般的なようでした。

サンタバーバラでは黒人が極端に少ない一方、中南米からの移民の割合が大変高く、こういった通いの清掃に従事しているのも、ほとんどがそういったヒスパニック系の人たちでした。サンタバーバラでは人種差別はほとんどないと言われていますが、人種格差は確実に存在していました。

ホームステイの期間はわずかでしたが、一般家庭での生活という、観光旅行では決して得られない貴重な経験をすることができました。しかし、学校から少々遠く、足となるバスも1時間に1本という不便さと、ホームステイでは何かとホストファミリーまかせにしてしまいがちなことから、語学学校の夏学期が始まると同時に学校近くのアパートに移りました。

## 2. 語学研修について

4月から11月までは、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (UCSB) 附属の語学学校 (UCSBエクステンション) において語学研修を行いました。サンタバーバラ校といっても、サンタバーバラは平成14年にサンタバーバラ市とゴリータ (Goleta) 市の2つに分割されており、現在UCSBがあるのはゴリータ市の方です。

UCSBエクステンションの英語コース (Intensive English Course) は大変規模が小さく、上級 (Advanced) ・中級 (Intermediate) 合わせてクラスが4クラス、専任講師も4人しかいません。(初級は現在、開講されていない。) 以前は多くいた学生も、9・11以降、特に中東方面からの学生が激減し、それに伴って講師も大部分が解雇されたとのことでした。

学校では、学期ごとにプレイズメント・テストによってレベル別にクラス分けが行われます。月～木曜日の10:40～13:00はCore Classと呼ばれ、各クラスの担任の先生によって授業が行われました。私が3学期にわたって在籍したAdvanced 2というクラスでは、教科書などは特になく、毎回、先生がプリントやTVニュースを録画したものを用意し、それをもとに授業が行われました。扱われたトピックは、人種問題などアメリカの国内問題、カリフォルニア州知事選挙、イラク戦争といった、比較的硬派なものが多かったように思います。これらをもとに、ディスカッションやプレゼンテーションを行うのですが、トピック自体の難易度が高かったこと、また私自身、こういった問題に対する予備知識が欠けていたこともあり、授業についていくのが辛いと思うこともありま

した。それでも、プリントが教材の時はまだ良い方でした。TVニュースを使った授業では聞き取り能力の不足から内容の半分も理解できず、積極的に発言するクラスメートを横目に、一言も発せずにいるということもしばしばでした。

Core Classの前後と金曜日には選択授業が開講されており、全員が2クラス選択することになっています。私は3学期とも作文のクラスをとったのですが、宿題として課せられた作文を仕上げるため、毎回、辞書や文法書と格闘していました。文章を書く際には、話す時以上に文法に気をつけなければならず、また、単調にならないよう、表現にも変化をつけなければなりません。もともと書くことが苦手な私にとって、このクラスは、授業というよりは修行に近いものがありました。それでも、この修行のおかげで、4月当初はたったA4用紙1枚の作文を仕上げるのに3時間以上かかっていたのが、3学期を終える頃には、1枚にかかる時間が1時間程度になり、また語彙や表現方法も増え、上達具合を自ら実感することができました。

## 3. 実務研修について

12月から3月までの4ヶ月間は、カリフォルニア大学のUniversitywide Office of Education Abroad Program (UOEAP) での実務研修でした。Education Abroad Program (EAP) とは、カリフォルニア大学と外国大学との間で行われる学生交流プログラムで、平成15年度には、このプログラムを通じて4,000名以上のカリフォルニア大学の学生が、35カ国、141大学へ留学しました。カリフォルニア大学の各キャンパスには担当オフィスが置かれており、UOEAPその本部に相当します。

UOEAPには学生の派遣、受入、経理といったセクションがあり、総勢100名ほどの職員の方が働いています。私は、学生派遣のセクションで日本、中国、シンガポールといった国々を担当しているグループで研修を行いました。



UOEAPスタッフとともに (前列左 古川研修生)



研修初日は、各キャンパスの新人EAP担当者に対する教育研修が行われ、幸運にもオブザーバーとしてそれに参加させていただくことができました。しかし、普通のアメリカ人が普通に話す英語は、つい3日前まで受けていた学校の授業とは異なり、スピードが早いうえに専門用語や略語も多く、ほとんど理解できませんでした。また緊張して前日はよく眠れなかったこともあり、途中から頭痛がして、辛い研修初日となりました。

研修中の主な仕事は、大学の申請書や資料などを各キャンパスEAPオフィスに発送すること、提出された関係書類に不備がないかチェックすること、および個人ファイルの整理とデータの入力でした。

日本の大学に提出する必要書類は種類が多いことに加え、コピー不可、写真は鮮明であることなど注意事項も多く、チェックするのも大変に気を遣いました。一方、例えば中国などは、申請書に添付する写真の大きさには指定がなく、パスポートのコピーも、文字が読めれば写真は不鮮明でも問題ないといった具合にかなり大らかで（実際、ほとんど顔が認識できない写真も多かった）、これも国民性の違いなのかと妙に感心してしまいました。

UOEAPではペーパーレス化が進んでおり、申請書や作成要領、記入例など、学生が必要な様式のほとんどはホームページからダウンロードすることができます。その一方で、留学中の学生全員分の個人ファイルが作られ、申請書などの提出書類はもちろん、担当者との間でやりとりされたメールなど、学生に関わるすべての情報は印刷された状態でこのファイルに納められました。4,000名の個人ファイルは、留学先の国ごとにキャビネットに収められ、必要な時に必要なファイルがすぐに取り出せるようになっており、情報の管理と活用がとても上手に行われているという印象を受けました。

研修中、とても残念に思ったエピソードを一つ紹介します。EAPを通じて留学しようとする学生の多くは、自分たちの両親や祖父母の国を選ぶ傾向がありました。つまり、日本へ留学する学生には日系人が多く、名字や外見だけなら日本人と全く同じです。彼らの多くが、日本でのホームステイを希望していましたが、希望が通ることはほとんどありませんでした。その理由を担当の方に聞いたところ、「日本人はアジア系の学生を嫌がるから」という答が返ってきたのです。もちろん、学生を受け入れる家庭がそもそも少ないという現状もあります。しかし、日本人のアジア蔑視の傾向がこのような所にも表れていることに、私は一日本人として大変情けなく、恥ずかしい思いで担当の方の言葉を聞きました。学生さんたちが、自分たちのルーツである日本に失望することなく、充実した留学生活をおくって欲しいと、心から願わずにいられませんでした。

おわりに

最初は長いと思っていた1年という期間も、終わってみるとあっという間で、いろいろとやり残してしまったことも多いような気がします。しかし、アメリカでの暮らしや各国からのクラスメートとの交流を通し、日本という国、また日本人である自分自身を再認識することができ、私にとって、かけがえのない1年となりました。

最後となりましたが、今回、このような貴重な機会を与えて下さった東京大学を始め、様々な形でお世話になった皆様に心からお礼を申し上げますと共に、この研修で得たことを今後の仕事に生かすよう努力して行きたいと思えます。

## 長期在外研修を終えて

研究協力部国際課国際企画係 東郷太郎  
(カリフォルニア大学サンディエゴ校)

はじめに

私は、平成14年度「東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）」に参加しカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）に派遣された。研修期間は平成15年3月29日から平成16年3月27日までの1年間で、研修は語学研修と最後の3ヶ月間の実務研修で構成されていた。以下、その内容等について報告する。

### 2. 英語学習について

最初の6ヶ月（当初予定は9ヶ月）は、UCSDのエクステンションという附属施設で語学コースを受講した。授業は午前中を中心に月曜日から金曜日まで、必修のコアクラス（ホームルーム等もある総合学習）と文法以外は選択クラスであった。教室はUCSDの敷地内にあり、図書館やトレーニングジムなどの施設も至近で非常に恵まれた環境で研修することができた。

私は語学コースに臨むにあたっては、作文の技術、特にEメールを書く技術の習得を目標としていた。昨今のインターネット環境の充実等により、Eメールはビジネスの場で最も重要なツールとなっている。実際の仕事では、テンプレートの使用により、英文のEメールを書くことは可能であるが、この機会にしっかり学習したいと思ったのである。このため、クラスは作文、文法及びポキャブラリーを中心に選択した。この中でも作文の授業はすばらしいものだった。相当量の宿題が毎回課されたが、講師は誠実に添削してくれ質問にも快く応じてくれた。英作文のクラスでは他に夜間のビジネスライティングというクラスを自費で受講した。このクラスは英語を母国語としないビジネスパーソンを対象としていたため、大変レベルが高かった。Eメール、手紙、履歴書、メモ等ビジネス文書の作成法を教わり、それを自作して

添削を受けることの繰り返しだったが、得るものは多かった。特に、英語の能力を前提としたクラスで学習したことは、後の研修・生活に大きな自信となった。

その他のクラスの中では、発音・アクセントの授業が印象深かった。それまでの英語学習の経験から、自分の発音について流暢さという面では諦めていた部分も大きかったが、このクラスを受講し、基礎からしっかり学ぶことができ、確実に上達した。発音は、英語学習の上で、典型的な日本人の弱点であるといわれるが、学校教育の不備の問題だけでないのかと感じた。

### 3. ビジネスエッセンシャルコース

3期目は、語学コースの代わりにビジネスエッセンシャルコースというビジネスの基礎を学ぶコースを受講した。当初予定では、語学コースを受講する予定であったが、語学コースは基本的に同じことの繰り返しであるので無駄を避けたかったことと、4期目の実務研修に対応するため英語の訓練としても最適であると考え、国際交流課（現国際課）の担当者と相談し受講を決めた。

このコースは、ビジネスをある程度経験した者を対象としたコースで、科目ごとに現役のビジネスパーソンが講義を担当した。受講科目は、リーダーシップ、マーケティング、ヒューマンリソース、ビジネスエシックス、ビジネスベーシック、ワークプレイスUSA、ミッションステートメント、プロジェクトマネジメントから構成され、一通りの知識が得られるようになっており、ほとんどの科目は、講義、議論、演習（あるいは発表）から構成されていた。宿題の読書量も語学コースが1科目当たり週3～4ページ程度であったのが、50ページ以上となり、授業時間も増えたが内容も充実していたように思う。

また、このコースでは毎週木曜日が、インターンシップに充てられており、私はサンディエゴ美術館（SDMA）でインターンとして働いた。基本的にはボランティアの方々と作業や、簡単な受付業務を中心とした比較的単純な仕事ではあったが、アメリカの人々の積極的な社会貢献の現状を体験できて良かったと思う。また、SDMAのアットホームな職場の雰囲気が気に入ったこともあり、コース終了後も週一回程度、ボランティアとして働かせてもらった。

このコースは全体で、UCSDの単位として22単位が認められており、語学コースに比べ量的にも質的にも厳しかった。英語はできることが前提となっていたが、ビジネスユースに耐えうる英語を身につけたいと思っていた私には非常に刺激的で実りの多いコースとなった。また、英語以外にも、アメリカでの会議の手法、プレゼンテーション技術、企業に対するアメリカ人の認識や目標の設定方法など興味深かった。

### 4. 実務研修

平成16年1月5日から3月25日まで、UCSDのPAO（Programs Abroad Office）で実務研修を行った。PAOは、UCSD全学の学生向け海外経験（留学、インターンシップなど）の事務全般を扱う組織である。PAOには、ただ海外で勉強したいという漠然としたものから、特定のプログラムに参加したいという目的のはっきりしたものまで多くの学生が訪れる。学生は最初にPAOの図書室で自分の希望に沿うプログラムを探す。図書室には、海外経験のある学生インターンが配置され、必要に応じてアドバイスをする。学生の希望がある程度まとまると、常勤職員のアドバイザーに1～2回面接し、書類の提出、単位の認定申請などを行い、海外渡航者向けのオリエンテーションに参加して出発する。学生向けの金銭的な援助は充実しており、他大学のプログラム（UCSDには他大学学生向けのプログラムは存在しない）に参加する学生にさえ奨学金が出ることも多く、大学全体で学生の海外経験を後押ししている印象を持った。

PAOが扱っているプログラムは、大きくEAP（Education Abroad Program）とOAP（Opportunities Abroad Program）に分かれる。

EAPはカリフォルニア大学（他のキャンパスを含む）と他大学との学生交換協定に基づくプログラムで、この場合、学生は別途授業料を支払う必要はないし、取得単位も問題なく認められる。ただし、UC全体からサンディエゴ校への定員の割り当てが決まっており、成績（GPA）と論文により選考される。

OAPは、大雑把に言うとEAP以外の海外プログラムである。他機関を経由する留学、海外でのインターンシップ、ピースコープ（日本の海外青年協力隊のモデルとなったプログラム）等がある。費用はUCSDの授業料とは別に支払う必要があるし、単位については、学部の担当事務で認定してもらう必要がある。この際、UCSDの求める水準に達していない講義であると認定されると、成績を減点調整されることになる。

私は、基本的にコーディネータのビル・クラビー氏のアシスタントとして働いた。氏はOAP全般と、日本のEAPを担当していた。UCSDは、本学事務職員のインターンを受け入れるのは初めてであったため、私に与える仕事には苦慮していたようであった。そこで、クラビー氏と話し合いの時間を作り、単純作業であっても仕事をもっともらいたいこと、その時間を私からの質問に当ててもらえるようお願いした。その後は、クラビー氏と私の関係は安定し、お互いに得をするシチュエーションを作ることができ、学生との面談を見学させていただいたり日本への学生向け資料作成のブレインストームに参加させていただくことが多くなった。面談を見学した後には5～10分程度疑問点について議論し、時にはクラビ

一氏から、日本の大学や社会について質問を受けることもあった。

明治学院大学へEAPで留学する学生向けオリエンテーションの際には、資料作成、会場設営など、クラビー氏と2人でほとんど全てを行った。5人の学生と、昨年度の実験者5人、明治学院大学からの交換留学生3人と小さなミーティングであったが、一番印象に残っている。その際作成した資料は、今後の他の日本向けオリエンテーションでも使用してもらえとのことであった。

また、学生インターンとの交流は、一年間の研修全体の中でも最も印象深かった。PAOでは学生インターンを10名雇用しており、常時3名程度が勤務していた。私は彼らの仕事（ポスター貼り、チラシ作成、書棚整理）を手伝うことも多く、何名かとは食事に行ったり、映画を見に行ったりする友人となることができた。彼らとの付き合いを通じ英語もかなり上達したし当地の大学生の現状を知ることができ大変有意義であった。



PAOのインターン（左）と東郷研修生（右）

## 5. 終わりに

アメリカに一年間滞在し、不快な思いをすることはほとんどなかった。暴力や人種差別のような、よく言われるアメリカの負の面にも直接関わらなかったし、良い出会いに恵まれ充実した時を過ごすことができた。純粹にありがたいことだったと思う。しかし、これは私が一年間を通じて常に「お客さん（＝受け入れられる側）」だったことと無関係ではないと思うし、私を受け入れてくれたアメリカ・日本の関係機関の体制がとりわけすばらしかったことも事実である。今後は自分が受入側として職務に邁進することで、この恩に報いていきたいと思う。

\*なお、文部科学省及び日本学術振興会派遣事業等で現在海外へ派遣されている事務職員は以下のとおりである。（ ）内は派遣前所属部署

飯塚祐二（学生部厚生課厚生企画係）

派遣先：カリフォルニア大学サンタバーバラ校（米国）

派遣期間：平成16年3月26日～平成17年3月25日

派遣プログラム：東京大学国際交流担当職員海外研修（長期）

野仲容子（研究協力部国際課）

派遣先：モンタナ州立大学等（米国）

派遣期間：平成16年4月12日～平成17年3月29日

派遣プログラム：文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム

澤登ゆり子（研究協力部国際課）

派遣先：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター（スウェーデン）

派遣期間：平成16年4月1日～平成17年3月30日

派遣プログラム：日本学術振興会国際学術交流研修

事務職員の海外長期研修プログラムとして以下のものがあるが、詳細については国際課に照会されたい。

- ・東京大学国際交流担当職員海外研修（長期）
- ・文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム
- ・日本学術振興会国際学術交流研修
- ・日本学術振興会研究連絡センター事務官派遣
- ・中国政府奨学金留学生（行政官派遣）
- ・日墨研修生・学生等交流計画派遣生



## 医学部附属病院 東大病院にこここボランティア創立10周年記念式典開催される

医学部附属病院では、平成6年7月に新外来棟オープンと同時に「東大病院にこここボランティア」を導入し、今年で10周年を迎えたことを記念して、東大病院にこここボランティア創立10周年記念式典が、9月3日（金）18時から医学部附属病院入院棟A15階大会議室において開催された。

式典に先立ち、財団法人癌研究会附属病院・武藤徹一郎病院長（元東大病院長）により「大腸学事始め」という



東大病院にこここボランティア導入時に病院長を務められた武藤徹一郎癌研附属病院長による講演会

テーマで講演会が行われた後、加我君孝教授（医療サービス推進委員会委員長）の開会の辞に引き続き、文部科学省高等教育局・石野利和医学教育課長から祝辞が述べられた後、森田晃弘東大病院にこここボランティア代表の挨拶及び永年（10年間）ボランティアとして活動された22名に永井良三病院長から表彰状及び記念品の授与が行われた。



永年（10年間）ボランティア活動者



ボランティア活動者への表彰状及び記念品の授与

式典終了後、祝賀会が開催され、盛会の内に会を終了した。



永井良三病院長による祝賀会挨拶

ボランティア活動は、外来玄関でのご案内のほか入院患者さま向け図書館「にこここ文庫」での図書の貸し出し、院内学級への送迎、小児科病棟における子どもたちの遊び相手や絵本読み、入院患者さまの散歩のお手伝いなど、この10年間で、外来から入院へと活動範囲が病院全体に拡大され、ボランティア活動の益々の充実が期待される。

また、最近では東大の学生のボランティアとしての参加が増えてきたのも大きな特徴である。

医学部附属病院

平成16年度防災週間に実施した行事等について

医学部附属病院（永井良三病院長）は、8月30日（月）から9月5日（日）までの防災週間期間中に次のとおり総合防災訓練等を実施した。

1. 総合防災訓練（東海地震対応）広域医療搬送実働訓練について

- ・9月1日（水）に内閣府主催総合防災訓練（東海地震対応）広域医療搬送実働訓練が実施され、病院から医師1名・看護師4名・事務職員1名・文部科学省職員1名が参加した。

訓練内容

- ① 医師等の参集地点への参集  
（陸上自衛隊立川駐屯地）  
↓ ※自衛隊航空機での搬送
- ② 被災地内拠点への参集（御殿場会場）  
↓
- ③ 自衛隊航空機による患者の搬送  
（御殿場会場→陸上自衛隊立川駐屯地）  
↓
- ④ 受入病院までの搬送  
（陸上自衛隊立川駐屯地→東大病院）

2. 東京都・台東区・墨田区・荒川区合同総合防災訓練（医療救護活動訓練）

- ・9月1日（水）に東京都・台東区・墨田区・荒川区合同総合防災訓練（医療救護活動訓練）が実施され、病院から医師1名、看護師1名、事務職員1名が参加した。

訓練内容

トリアージ訓練

3. 東京大学医学部附属病院総合防災訓練について

- ・9月2日（木）に地域住民の方も参加した総合防災訓練を行った。

なお、防災訓練終了後地域住民の方々とは災害時の対応などについて意見交換を行った。

訓練内容

- ① 地域住民の方を招いてのトリアージ訓練（入院棟A）
- ② 火災発生の想定による消火・避難訓練（入院棟B）
- ③ 起震車・煙ハウスによる地震体験訓練（研修講堂前）
- ④ 文京区防災担当官による講演



地域住民の方を招いてのトリアージ訓練（入院棟A）



起震車による地震体験（研修講堂前）

大学院薬学系研究科・薬学部

台北医学大学杏声合唱団と東京大学音楽部コーラルアカデミーのジョイントコンサートが開かれる

8月31日（火）15時より、薬学系研究科総合研究棟の講堂にて、台北医学大学杏声合唱団と東京大学音楽部コーラルアカデミーのジョイントコンサートが開かれた。本企画は、当研究科出身で現在台北医学大学名誉教授の陳朝洋先生から、杏声合唱団が来日公演の際に、国際交流の意味を込めて、是非東京大学にて演奏を行いたいとの申し出があり、ちょうど今夏に完成した総合研究棟の新講堂のお披露目も兼ねて実現した。また、当研究科のOBを通じて、音楽部コーラルアカデミーにも出演依頼を行い、合同演奏も実現することができた。海老塚薬学系研究科長、許重義台北医学大学校長の挨拶、贈答品の交換の後、各団の単独ステージ及び合同演奏ステージが行われた。講堂の音響が予想以上によかったこともあり、素晴らしい演奏とあいまって、夏休み終盤のひとつときに、心落ち着かせることができた。観客も学内外より多数集



総務企画室

留学生の進路希望に関する調査結果まとめる



海老塚薬学系研究科長（左）と許台北医学大学校長（右）による贈答品交換

めることが出来、アンコールが4曲も演奏されるなど、まさに盛大な会となった。演奏会後、薬学部図書館ロビーにて懇親会も催され、日本人学生、留学生及び教職員と台北医学大学の合唱団員、教職員との間で親睦を深めることが出来た。本企画・運営は、薬学系研究科の特に中国語に堪能な留学生の多大なる協力なしにはなし得なかった事を付記し、感謝の意を表したい。



両合唱団による盛大な合同演奏

6月16日（水）から7月15日（木）にかけて実施した、「留学生の進路希望に関する調査」の結果がまとまった。この調査は、留学生の卒業後のキャリア形成を支援する体制を検討する基礎資料として、現在本学に在籍する留学生（研究生を含む）2,103名に呼びかけ、540件の回答を得たものである。

調査結果からは、日本企業への就職意向を持つ留学生も多く、また、就職活動に関する情報の入手が困難な状況も確認された。主な結果は以下の通り。

① 直近の卒業・修了後の進路の希望

卒業・修了後すぐの進路の希望は、「日本で就職」が最も多く48.0%、ついで「母国で就職」が39.1%、「東京大学で進学」が37.6%である。

② 就職先の希望

希望の勤務先は、民間企業が58.9%と最も高く、政府・行政機関に33.5%、国営企業が29.2%となっている。また、そのうち、日本にある企業、母国にあっても日系企業の希望が上位を占め、日本企業もしくは日本国内での就職の意向の高さが窺える。

③ 将来的な進路の意向について

将来10年先くらいの進路の希望は、「母国で就職」48.9%、「日本で就職」40.0%、ついで「母国で進学・研究・教育」36.7%、と直近の意向に比較して母国での希望が増加する。一方で、「母国にある日系企業」「日本・母国以外の海外にある日系企業」の数値も増加が見られ、将来的にも日系企業とのつながりを想定しているものも多いという結果となっている。

④ 就職活動時に必要な情報

「留学生を積極採用している企業名」が最も高く88.9%。ついで、「就職活動の具体的方法」70.4%、「待遇・給与など企業情報」「就職活動のスケジュール」62.0%といった、具体的活動にまつわる情報が必要とされている。その他、自由回答中에서도留学生の就職に対するサポートの要望が数多く寄せられた。

この調査の詳細は

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gen/research.pdf> で閲覧できる。

なお、このように留学生に対する就職支援体制の必要性が確認されたので、10月1日（金）より留学生キャリアサポート室を開設する。留学生キャリアサポート室の業務内容、登録方法は、今後学内の掲示やメールによって告知される予定である。

## 大学院総合文化研究科・教養学部 スポーツ・トレーニング（実習）開講のお知らせ

お知らせ

教養学部では、専門課程の学生を対象としたスポーツ・トレーニング（実習）を下記の通り開講します。学部、学科を問わず専門課程および大学院の学生であればどなたでも他学部聴講として履修できます。ただし、卒業に必要な単位の一部として認定している学部は現在のところ、法学部（2単位まで）、経済学部（2単位まで）、教養学部（超域文化科学科のみ1単位）、教育学部（1単位まで）、文学部（1単位）です。その他の学部・研究科では随意科目となります。

科 目 名：スポーツ・トレーニング

開講学部：教養学部後期課程

単 位：1週1回90分1学期の授業で1単位を与える。

開講曜限および場所：

木曜3限（13:15～14:45）および4限（15:15～16:45）  
に本郷御殿下記念館および御殿下グラウンドで行う。

金曜5限（16:20～17:50）に駒場テニスコートで行う。

科目番号：

908（木曜3限）、909（木曜4限）、910（金曜5限）

本郷キャンパスでの開講種目と定員：

3限（13:15～14:45）

ソフトボール 40名

バレーボール 40名

卓球 20名

4限（15:15～16:45）

トレーニング\* 40名

バスケットボール 40名

バドミントン 20名

\*マシンの使用を中心とした筋力トレーニング。受講によって御殿下記念館トレーニングルーム使用資格が与えられます。

駒場キャンパスでの開講種目と定員：

金曜5限（16:20～17:50）

テニス 20名

ガイダンスおよび受講登録：

本郷キャンパスでの開講種目については10月7日（木）上記のそれぞれの授業時間に法学部25番教室で行います。テニス（駒場）については10月8日（金）5限に教養学部身体運動科学研究棟会議室で行います。なお、同一学期に2コマ以上履修することは出来ません。

問い合わせ先：

教養学部生命環境科学系 八田助教授（内線46862）

e-mail: hatta@idaten.c.u-tokyo.ac.jp

## 大学院総合文化研究科・教養学部 教養学部で第101回オルガン演奏会の開催 《「別れ」の主題に寄せて》

お知らせ

教養学部では、恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。このたびは、ドイツから国立ベルリン大聖堂合唱団をお迎えし、オルガン曲とともに合唱の数々をお聞きいただきます。どうぞご期待下さい。

入場は無料です。ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧下さい。http://organ.c.u-tokyo.ac.jp

日 時 10月13日（水）18時30分開演

場 所 教養学部900番教室

曲 目

グレゴリア聖歌

「サルヴェ・レギナ」

H・イザーク

「あなたはまことに美しい」

オルランド・デイ・ラッソ

「巫女の預言」より

L・レヒネル

「生と死の格言」より

H・イザーク

「インスブルックよ、さようなら」

／バッハ コラール「今や野山は憩いて」

作者不詳

「さらばと告げん」

J・P・スヴェーリンク

「歳若くして命尽きたり」

J・ブラームス

コラール前奏曲「おおこの世よ、さようなら」

「マリアの歌」

M・レーガー

「マリアの歌」

ドイツ民謡より

指 揮： カイ＝ウヴェ・イエルカ

オルガン： ミヒャエル・ウツ

合 唱： 国立ベルリン大聖堂合唱団

（オルガン委員会）

生産技術研究所

## 生産研で第13回技術職員等による技術発表会を開催

お知らせ

生産技術研究所では、本年も技術発表会を下記のとおり開催いたします。

この発表会は、研究教育に関わっている専門分野の異なる技術職員が、経験によって培われた高度な技術や技法についての成果を発信・議論する場として毎年行なわれています。

本年は、駒場キャンパス内の他部局の技術職員による招待講演や、企業から技術者を招き、経験に培われた加工技術についての特別講演も企画しています。今回で発表会は13回を数え、発表内容も研究所の研究テーマの変化にともない多岐に渡ってきております。技術職員等の業務は地味ではありますが、堅実な日ごろの活動ぶりとその成果が発表されます。

多数のご来聴をお待ちしています。

日時：10月28日（木）10時～17時30分  
場所：生産技術研究所 第1会議室（Dw601）  
（発表会終了後に懇親会を予定しています）  
問い合わせ：実行委員長 高間信行（内線56685）  
Email：nob@iis.u-tokyo.ac.jp

史料編纂所

## 国際研究集会国際学士院連合推薦事業：日本関係海外史料研究 オランダを中心に

シンポジウム・講演会

日本学士院は、国際学士院連合を通じた各国学士院とのネットワークを生かし、国際的な協力体制のもとで、日本に関する海外所在史料の調査、蒐集を新たに展開し、その成果を世界の学界に還元することを計画しています。その新たな第一歩として、今年度は計画推進のため日本側研究者との意見交換を立案し、オランダからブリュッセイ教授（ライデン大学）とムスハルト博士を招聘しました。史料編纂所もこの機会を活かし、在オランダ日本関係史料の収集のあり方、研究の進め方について、両氏を囲んだ研究集会を、下記のとおり企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

日時：10月19日（火）10時～17時

場所：総合博物館ミュージズホール

日程：  
（午前）  
ブリュッセイ教授（ライデン大学）講演  
ムスハルト博士（ライデン大学元写真博物館長）講演  
（午後）  
松方冬子（東京大学） 近世史から  
石田千尋（鶴見大学） 貿易史から  
小川亜弥子（福岡教育大学） 教育史から  
桜庭美咲（昭和女子大学） 陶芸史から  
塚原東吾（神戸大学） 環境史から

参加の申し込み先：

木村直樹（史料編纂所）  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学史料編纂所  
TEL (03) 5841-8402  
FAX (03) 5841-5956  
e-mail: naoki@hi.u-tokyo.ac.jp

会場の準備の都合により、事前の予約をお願いしております。



## 「目的意識」対「漫然」

学問上・人生上の忠告を学生が求めてきても、たいていは「そんなこと俺だって知るか」と答えるのみだが、ただひとつ自信をもって言うのが、「大人はよく、漫然と生きていては駄目だ、きちんと目的を持ちなさい、などと言いたがるが、あれはただの寝言だから適当に聞き流してしまえ」。目的意識という聞こえはいいが、あることに意識を集中するというのは、ほかのことに對して意識を閉ざしてしまうことである。特定の本を探しに本屋へ行けば、ほかの本は目に入りにくい。漫然には漫然の効用がある。少なくとも学部生のうちは、たいていはのことは漫然でいい。僕は文学部英文科の教師だが、来てほしいのは要するに英語が読めて小説が読める学生である。目的意識なぞ二の次だ。

「漫然がいい」と思うことに、実は大した根拠はない。自分が漫然とやってきて、とりあえず（自分にしては）うまく行った、という程度だ。はじめはアメリカの戦後文学を専門にしたかったがモノにならず、古典の方が面白そうだ



と思ってそっちへ行きかけたがこれはもっとモノにならず、そうやってフラフラしているうちに成り行きで現代文学の翻訳や紹介を主な仕事にするようになって、これはまあ今までのところ一応何とかなっている。はじめからはっきり目的意識なんか持っていたら、そうやってあっちへフラフラ、こっちへ……なんてこともできなかっただろう。まあもちろん、「そんなふうに漫然とやってるから、しよせん君はその程度なのさ」という声も聞こえるのだが。

近年は大学も、中期計画だ何だのと、きちんと目的意識を持つことを求められている。これも世の流れで、そのうち何かモノになると思いますからおカネください、ではもう通らないのだろう。大学という組織を、学部生と一緒にするわけにも行くまい。お上の声を「聞き流してしまえ」とも行かないだろうし。そうとわかっていても、これってソ連の五カ年計画みたいだなあ、とつい思ってしまふ。あれもはじめはそれなりにうまく行っていたみたいだけど、だんだん無理が生じてきて、結局国家ごとコケてしまった。大学もそうならないといいですが。

(大学院人文社会系研究科 柴田元幸)

(淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

〔訂正〕

「学内広報」において一部誤りがありましたので、訂正してお詫びします。

No.1296 (2004.9.8)

- 1 ページ右段下から4行目、22ページ上から1行目  
(誤) 教官 → (正) 教員
- 3 ページ右段2行目  
(誤) 史料編纂所 → (正) 東洋文化研究所

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1297 2004年9月22日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393  
e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>



東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO